

不倫

とんだ玉三郎

一 誤解

最近、妻の態度がなにか変わったと兵頭正彦は感じている。それもあの夢を見てからのことである。その夢はざっとこんなものだった。

正彦は部長にヨーロッパへの出張を命じられて出発した。飛行機のなかでキャビンアテンダントが忙しそうに歩き回っている。しかし、客は正彦だけだ。周りには誰も乗っていない。座席を倒して横になっていると、キャビンアテンダントが正彦の席に近づいてきた。彼女は着ているものを脱いで隣の席に座った。正彦はその顔を見てびっくりした。学生時代、卒業まで同棲していた本田香奈である。女の顔は正彦の目のすぐ前にあつた。正彦は思わず「香奈、好きだよ」と叫んだ。すると女の顔が正彦の顔に被さり唇を合わせてきた。生暖かい感触を唇に感じた。その余韻を残すうちにまた眠りに入ったようだ。

1

妻の彩子は朝食の用意をしようとして起き上がった時に隣に寝ていた正彦の口から「カナ、好きだよ」という言葉が出てきたのを耳にした。寝言だと思つたが、続いて口をすぼめて、キスをするようなしぐさ。彩子は「この人、昔の彼女の夢でも見てるんでしょ。でも、『カナ』って、どこかで聞いたことがあるな」と思っているうちに「あつ」と思った。「あの子の名前も『華菜』だったわ」と二週間ほど前のことを思い出した。

朝食の用意をしていると、テーブルに載っていた小箱を取り上げて娘の夏美が彩子に声をかけた。

「チョコレートの箱があるけど、お父さんが会社の人からもらったものなのかなあ」

「そうだろうね。どうせ義理チョコよ」

「でも高そうよ。リボンの下に紙が挟んである。なんて書いてあるのかな」

と興味深げに言つて、夏美は紙を取り出し、拡げて書いてあるメッセージを声を出して読みあげた。

「『いつもいつも、お世話になってありがとうございます。お仕事、頑張ってください。これからもずっとよろしくお願いしますね。新藤華菜』最後にハートのマークがあるよ。それになんか跡が薄くついてる」

彩子も包丁の手を止めて手を拭き居間に行って、メッセージを夏美から取り上げて読んでみた。紙に口付けしたのだろう口紅の跡もうつすらとある。整った女文字に少し嫉妬を感じた。

起き出して来た正彦にチョコの箱を見ながら夏美は訊いた。

「パパ、これ、会社の人からもらったの？ メッセージもついてたよ」

「えっ、そんなのついていた？」

と慌てて紙を取り外して、ポケットにしまった。正彦はメッセージを外しておけばよかったと娘に見られてしまったことを後悔した。彩子にも聞こえるように言った。

「出張の時に飛行機のチケットやホテルの予約の手配をしてくれる旅行代理店のパパの職場の担当の女の人からもらったんだよ。旅行会社がチョコを準備して女の人にメッセージを書いてもらったんだろう。夏美がチョコを好きなので持って帰ったんだよ」

モロゾフの高級品だった。

夏美は言った。

「パパ、ありがとう。パパってもてるんだね」

それを傍で聞いた彩子は「近頃の若い子は男の気を惹くようないたずらをするものかしら」と、その時は気にも留めなかった。

彩子は二つの出来事を重ね合わせて考えに耽った。

結婚して十四年目だ。夫婦の営みの頻度も年を追うごとに少なくなっている。それが当たり前と思っていたが、外に女が出来たとすると話は違う。自分が女として見られていないことになる。内心、穏やかではなかった。そう言えば、最近、やたらと出張が増えたようだ。本当に出張しているのか、わかりはしない。疑い出したら、だんだんムカムカしてきた。「不倫相手にももらったチョコを娘にやるなんて、どんな神経してるんだ」と怒鳴りつけてやりたかった。それを娘に分けてもらって喜んで食べた自分に腹が立った。

「こんなことはひとりでも考えても悩むだけだ。有紀に打ち分けてみよう、そうすれば、少しは気持ちになるかもしれない」と思った。護国寺近くにあるフレンド出版が彩子の勤め先で、岡村有紀は同期入社の子の親友だった。

「ちょっと、聞いてもらいたいことがあるんだけど」

会社のカフェテリアで昼食を一緒にとっているときに訊いた。有紀も深刻な顔をした彩子を見て何事かと思った。

「子供の学校のことかしら」

夏美は今年、中高一貫の女子校に入る。そのことを有紀に話したことがあるのを思い出した。有紀の娘もその学校に昨年、入学したのだった。

「いや、そのことじゃないの。ちょっと深刻なことなの」

「いいわよ。今日は残業もなさそうだし、貴女さえ都合がよければ、帰りにでも」

有紀とは帰りに駅近くの喫茶店で落ち合うことにした。

定時に会社を出てその店に向った。この辺りは都心の喧騒がなく落ち着いた感じの店が多い。やがて、有紀が入ってきた。

「深刻な顔をして、なにかあったの」

彩子は夫が不倫をしているらしいと寝言とチョコの件を打ち明けた。

「彩子の旦那さんは鉄鋼メーカーに勤めてるでしょ。堅い職業よ。不倫なんかが会社にバレるとまずいから、そんなことしてないと思うよ。単なる思い過ごしよ。それとも現場をおさえるとか、ちゃんとした証拠でもあるの」

「証拠って、二人でいるところを見たわけでもないし、服に口紅がついてたり、ポケットにホテルのレシートがないかとか、それとなく探ってみたが、特に変わったことはなかったわ」

「思い過ごしよ。不倫していれば、奥さんに土産を買ってきたり、急に優しくしたり態度が変わるものよ。もう少し観察してみたら」

有紀は現在、不倫中だ、勘所を掴んでいる。

「そうかしら。最近、出張が多くなったようなの。本当に行ってるのだろうかしら」

と彩子は有紀の話を半信半疑で聞いた。

正彦であるが、あれ以来、妻の態度が少し気になる、よそよそしく感じる。ベッドは床を上げることができないから、毎日上げ下げする布団のほうが清潔でいいとの妻の意見で、布団を敷いて寝ている。新婚当時はダブルサイズの布団と一緒に寝ていたが、娘が生まれてから、いつのまにかふたつの布団を並べて敷くようになった。あの夢を見て以来、妻がふたつの布団の間を大きく開けて敷くようになったことだ。何か意図を感じる。正彦は大学時代からの親友で遊

び人でもある松本に相談してみることにした。

松本の会社に近い赤坂の居酒屋で会うことにした。

「なんだ、話って」

「最近、妻がよそよそしい態度に出て気になっている、不倫でもしているんじゃないか疑われているように感じる」

「お前も損な男だな。不倫してないのに疑われたりして。それなら、いっそ不倫したらどうだ。でも用心しろよ。俺のところのような派手な会社と違って、お前のところは堅い会社だから不倫がばれると出世に響くらしいからな」

松本は大手の広告代理店に勤めている。会社での不倫はよくあることらしいと松本から聞いたことがあった。

「不倫はばれないようにやることだ。セックスに使うスタミナだけじゃなく、周囲の目を気にしたり、妻に悟られないようにする気遣いも必要だ。問題はお前にそのエネルギーがあるかだ。自信がないならやるな」

『不倫の達人』と豪語しているだけに適切な助言なんだろうなと正彦は思っていた。その後、大学時代の思い出や最近の仕事のことなど、とりとめのない話をして別れた。

帰りの電車のなかで正彦は考えた。「そう言えば、最近は出張に行ってもろくに土産も買ったことがないな。これからは少し気にかけてやるか」

海外出張の帰りに、新婚当時、妻が好きだと言っていたデオールのオードトワレを買って帰った。

「これ、お土産」

正彦は照れながら、彩子に渡した。

「ありがとう。珍しいこともあるものね。どういう風の吹き回しかしら。お土産なんか、買ってくれたこともなかった癖に」

正彦は喜ぶと思っていたのにそっけない。意外な反応に驚いた。

「一緒に出張した部下が妻に土産を買ってね。『課長もたまには奥さん孝行をしたらどうですか』って言うんだ。それで君が好きだった香水を思い出してね。思い切って買ったんだ」

と正彦は照れ隠しのような言い訳をした。

彩子は有紀の言った言葉を思い出した。急に土産を買うなんてやはり怪しい。

会社のカフェテリアで昼食中、有紀が彩子に訊いてきた。

「旦那さんの様子、その後、どう？」

「それがますます怪しいのよ。急に土産なんか買ってきたりして」

「そう、やっぱりね。夫婦も四十代にさしかかるとお互いに飽きるのよね。私のところもそうよ。ふたりとも外で仕事をしているでしょ。うちの旦那なんか『仕事とセックスは家に持ち込むものではない』って言うのよ。これって『不倫しろ』って言っているようなものよ」

有紀は会社に入りにしている独身のカメラマンと不倫をしているという。

「それで貴方も若い男を相手にしているわけね。でもお互いに外でセックスするくらいなら、いっそ、旦那と別れたら」

「不倫、つまり『浮気』と『本気』は別物よ。使い分けが必要よ。お互いに飽きるし、体力のこともあって不倫はいつまでも続けられるものでもないわよ」

「そんなに割り切れるものかしら」

「貴方の旦那さんもその相手といつまで続くか知らないけど、どこかで終わりよ。貴方も不倫相手を早く見つけなさいよ。フリーのレポーターをしている白石さんなんか、どうかしら。この前、私と貴女がロビーで立ち話をしていたのを見かけたらしく、しきりに貴女のことを訊いてくるの。『清潔そうで感じのいい人だ』って言ってたわ。貴女に好意を持っていそうよ」

「白石さんみたいな恰好いい人にそう思ってもらえるのは嬉しいけれど、貴女のようにうまくやれる自信はないし、ゴタゴタを起すのは嫌だから自重しておくわ」

「残念ね。お仲間が増えると思ったのに。不倫すると若返るわよ。私たち、まだ女を捨てる年ではないわ。還暦を過ぎても頑張ってる人もいるらしいし。まだまだ、老け込むのは早いよ」

彩子は時々わけもなく体の芯が火照るときがある。体が男を欲しているのだと思う、そんな時に限って正彦はぐっすり寝ているか、出張でいないのだ。なかなかうまくいかないものだ。有紀の言葉を思い出して考えた。「あの人が不倫しているなら、私だってやってもいいはず。ちゃんと自分で稼いでいるのだから。いっそ、白石さんを呑みにでも誘ってみようかしら」

でも、とてもそんな勇氣はなかった。

二 彩子の場合

彩子の担当している雑誌、月刊エグゼクティブで『LGBT』特集を組むこ

とが編集会議で決まった。彩子は特集の担当のひとりになった。白石さんにその方面についても書いてもらったことがあると有紀から聞いていたので白石さんに頼んで見ようかしらと思った。

有紀にお願いして、白石さんにひきあわせてもらおうこととした。社内のカフェテリアには有紀と白石は既に来て待っていた。

有紀が彩子に白石を紹介した。

「週刊ウーマンの記事を時々お願いしてる白石さんよ。この人は貴方が担当になったというLGBTの現状なども若者を中心にいろいろ取材してルポも書いているというから、まさに適任よ。それに若手のレポーターのなかではホープだと思ふのよ。白石さん、引き受けて下さるわよね」

白石ははにかみながら立つと、ひよっこりと頭を下げて挨拶した。

「レポーターをやっています白石淳一と申します。そんなに褒めて頂くと恐縮します」

有紀は白石に彩子を紹介した。

「兵頭彩子と申します。岡村さんとは同期入社で入社以来の付き合いです」

白石はさっそく、本題に入った。

「どんな内容について書けばよろしいですか。それによって僕なんかに書けるものかどうか考えてみます」

彩子は「なかなか謙虚な人だな」と思った。

「LGBTの日本の現状を書いて頂ければと思います」
「わかりました。それは僕の得意なジャンルの一つです。週刊ウーマンには時々使って頂いています。しかし、月刊エグゼクティブは週刊ウーマンとは読者層が違うと思いますので、どの当たりにポイントを置けばいいかをお聞かせください」

「月刊エグゼクティブの読者層は週刊ウーマンに比べて年配の方が多いため、LGBTという言葉を知らない人もいますでしょう。その人たちにも分かるようにLGBTとはどんなものなのかの解説も含めて書いて頂ければと思います」
「わかりました。『LGBTとの間に距離があり、それに縁のない読者向けに分かりやすく書いて欲しい』という事ですね」

彩子はなかなか、飲み込みの早い人だと思った。

「そうです。では、お願いできますよね」

「やりがいのある仕事ですね。これをきっかけに月刊エグゼクティブにも使って頂けるように頑張ります」

「どうぞよろしくお願いします」

横から、有紀も言った。

「いい人を紹介できてよかったわ」

レポーターの書いた記事を校閲し、出版社の主義や方針などと反したところがないかをチェックし、校正が必要とみなした部分はレポーターにその意図を確認、了解を得て、書き直してもらうこともある。そうしたやり取りのなかで記事は出来上がっていく。数回の打ち合わせをするうちに、彩子は白石とすっかり打ち解けた間柄になった。

白石の書いた記事は今回の特集のなかでも一番出来がいいと編集長に褒められた。お礼の意味で彩子は白石にご馳走してあげようと思い、出版社近くの小さなイタリアン・レストランに誘った。

皮のジャケットを羽織ったラフな格好で白石は現れた。長身でスポーツマンタイプの白石にはよく似合う。彩子はこの店をよく利用するので店長とも顔馴染みで、本日のお薦めを確認した。

「お薦めはさわらのソテーらしいけれど、それでいい？」

「魚、大好物なので喜んで頂きます」

「ワインは白でいいわよね」

「いいです」

注文を聞いた店長は奥に下がって行った。

「記事、よく書けていると編集長に褒められたわ。本当に有難う」

さつそく、彩子はお礼を言った。

「こちらこそ、お世話になりました」

ワインで乾杯することとした。

「白石さんに感謝を込めて乾杯」

と彩子が音頭をとり、グラスを合わせた。

「フリーのレポーターって自分の意思でどんなテーマでも自由に選べるからいわね。私たちはそれに比べて、発行部数をいつも気にしなければいけないので、関心のないものも書かされたりするので大変よ」

「そんなに楽ではないですよ。フリーのレポーターは出版社に仕事をもらって暮らしているので競争も激しくて大変です。ルポを本にして出したりできる人もいることはいませんが、そんなのは極々一部です。取材費もバカになりません」

「傍から見ているとそうは思わないけど」

「僕、実は新聞社か雑誌の出版社に入りたかったのです。もちろんフレンド出版も受けました。見事に落ちましたけれどね。入社試験で自分がその新聞や雑誌のオピニオンリーダーにすぐになるようなつもりで青臭いことを言っていたんだと今になって思います。世の中、そんなに甘くはないですよね」

それを聞いて、彩子は急に白石を愛おしく感じた。

料理が運ばれて、ワインも進み、二人はすっかり打ち解けた。

「失礼ですが、お一人ですか」

「残念ながら、と言つていいのか、まだひとりです。この仕事は収入が不安定なので、いいなと想う人が出来ても、なかなか相手にされないようで」

「そんなこと言わないで。貴方の腕は大したものよ。これからもどしどし頼むからやつて頂戴ね」

「有難うございます。ところで岡本さんと同期と伺いましたが、ということはアラフォーということですか、とてもそのようには見えません。私は三十三になったばかりですが。てっきり私より若いと思っていました」

彩子はお世辞にしても若く見られたことが嬉しかった。娘の授業参観に行っても周りの人に比べ、自分がずっと若く見えることに密かに自信は持っていたものの……。

「いやいや、もう、すっかりおばさんですよ。今年、中学に入る子供がいるのですから」

「そうですか。でも、羨ましいな、旦那さんが、こんなに若くて綺麗な奥さんがいて。僕なんかにはとうてい敵わない夢ですが」

白石もアルコールが入った所為か、饒舌になっている。

「そんなことないですよ」

彩子是不倫の疑いのある正彦の顔を思い出しながら、相手がどんな女かしらないが、『夫は女を見る目がないのだ』と自分が優位に立ったような気がした。

「この後、時間ありますか。もし、よければ、僕の行きつけのバーに付き合つて頂けませんか。こんな洒落た店じゃなくて下町のほうですが」

彩子は時間が気になったが、多少、遅くなっても編集長に誘われて断れなくなつたとも言えればいいと思ひ、ついていくことにした。

「少しだけならいいわ。貴方がどんな店で呑んでるか、興味もあるし」

「そうですか、有難うございます」

彩子は会社のカードを使って払いを済ませた。フリーのレポーターの接待には著名な人でない限り交際費を使つてはいけないことになっているが、取材の

ためにキーマンを接待したことにすればいいだろう。会社はこの辺りは意外にルーズなのを知っている。タクシーを止め、その店に向かった。

バーにはカウンターに八席、それにボックス席がふたつある。二人はカウンター席に座った。バーテンが白石のキープしてあるボトルを取り出し、二つの水割りが用意され、ナッツが小皿に盛られて出てきた。

「改めて、乾杯」

今度は白石が音頭を取った。それから、白石が取材経験や自分の田舎のことなど、しきりにしゃべり、彩子は専ら聞き役に回り、気が付いたら、普段、無口な夫と比較している自分があった。

その後、彩子は白石と時々食事をしたり、呑みに行くようになった。彩子に「不倫」という言葉が頭をよぎったが、娘のことを考えるとそれを否定した。一方、不倫をしているらしい夫のことを考えると白石に強引に誘ってもらいたいとの思いもあり、心は揺れていた。

風邪を引いていて病み上がりで出社した彩子に白石からの誘いがあり呑みに行った。体調がまだよくなかったのだろう、酒が早く周り、気分が悪くなった。「悪いわね。せっかく誘って頂いたのに病み上がりで呑んだ所為か、気分が悪いわ。どこか、楽になれるところに連れてって」

白石はそっと訊いた。

「二人だけになれるところでいいですか？」

「いいわよ、早く連れてって」

幸い、夫は海外出張だ。しかし、夏美のことが気になる。とっさに、言い訳を考えてメールした。

「お母さん、会社をずっと休んでいたから仕事が溜まっていて、明日の締め切りに間に合わせるため、会社で徹夜しなくてはいけなくなったの。悪いけど、朝ごはん作って、食べて学校に行つてね。ゴメンネ」

娘に対する罪悪感があったが、これで吹っ切れたと思った。

白石は奮発してシティーホテルを予約し、タクシーで向かった。

不思議なもので、ホテルの部屋で二人つきりになると、彩子の気分も回復した。彩子はこのところ、性交渉はすっかりご無沙汰だったので、前戯も夫にない新鮮さを感じるととも、若いたくましい白石を迎え入れた。幾度となく波

は訪れ、女である喜びを久しぶりに堪能した。しかし、朝になって横に寝ている白石の寝顔を見てこれが病みつきになったかどうしようかと不安になった。

三 正彦の場合

正彦は土産を買ってきたので喜ぶと思ったのに彩子には逆に怪訝な顔をされた。何かあったんだらうか、とますます分からなくなった。それで松本に相談してみることにした。

「悩んでるんだって、どうしたんだ」

「出張の帰りに土産を買ってやったら喜ぶどころか、怪訝な顔をされた」

「それは逆効果だよ。身にやましいことがあるから土産なんかで誤魔化そうとされているんだと思われるよ。ところで、妻と夜のほうはうまくいってるのか」

「それもだんだん、なくなってきた。子供も大きくなって、俺たちの年代は皆そういうものと思っているけれどね。でも、気になることがあるんだ。俺の家は、ベッドじゃなくて畳に布団を並べて敷いて寝るのだけと、最近、妻のヤツ、布団を離して敷くようになったんだ。俺とは寝たくないのかと思ってるね」

「おい、それは怪しいぞ。お前の奥さん、確か、出版社に勤めていたよな。俺も仕事柄、出版社と付き合いがあるが、出版社にはフリーのカメラマンやレポーターが多く出入りしている。芸術肌の奴も多くて、サラリーマンとは違う新鮮さがあるし、そういうヤツに限って女に手が早いからな」

「脅かすなよ。うちのヤツがそんなにもてるとは思われないがね。それに会社にはもつと若い子がいくらでもいるはずだよ。でも、そう言われれば、最近、呑んでくるのか遅く帰ってくるのが多くなったように感じるな」

「それはくさいぞ」

「『最近、異動してきた上司が呑むのが好きでよく誘われる、断ってばかりでは悪いので、時々、付き合っている』と言っていた。うちのヤツに限って不倫なんかないだろうよ」

「いやいや、お前の奥さん、アラフォー、それもまだ四十前だろう。油の乗り切ったばりばりの現役の女だよ。新婚の頃、お前の家に呼ばれて行って会ったが、スタイルもよくてなかなか美人じゃないか。もてると思うよ。『知らぬは亭主ばかり』だよ」

「女房を褒められて悪い気はしないが気になるな。それとなく様子を見てみる。もつとも俺は海外出張が多く、どこまで観察出来るかわからないがね」

『やられたら、やりかえす』だよ。お前、学生時代に本田香奈とつきあってきたよな。確か、俺たちより二個下だった。美人でお前がものにならなければ俺が頂きたかったくらいだ。お前が結婚するって聞いて、相手はつきりあの女だと思った」

「あの女とは卒業を機会に手を切った」

「今の奥さんも美人だけど、惜しいことをしたな。あれも今は女ざかりだろうな。よりを戻してみるといえるのはどうか。今、あの女はどこにいるんだ」

「俺の二個下のヤツが化学メーカーに行っていて、そいつ、香奈とゼミが一緒でよく知っているらしく、そいつの話では、そいつの会社の先輩が香奈と結婚して数年前に旦那の転勤で、今はアメリカに住んでいると言うのだ」

「それじゃ不倫は無理だな」

正彦は毎年やっている大学時代のテニスサークル仲間の集まりに出て見ることにした。新宿で開かれたその会に出ると、以前、香奈の消息を知らせてくれた後輩の土井と会った。

「先輩、お久しぶりです。お元気ですか」

「土井、元気にやってるか。お前がこの会に出て来るのも珍しいな」

「元気です。遅咲きですが、やっと昨年結婚しました」

「それはよかったな。じゃ、今はまだ新婚気分だ」

「今度、アメリカに転勤になりました。多分、相当な期間の駐在になるので、この会も当分出られそうにないので久しぶりに来てみたんです」

「いいじゃないか、新婚生活を海外でやれるなんて」

「それが妻が英語があまりうまくないので心配なんです」

「そんなもの、すぐに慣れるよ。心配するな」

「ところで私の会社の先輩が本田香奈と結婚したって前に話したのを覚えていますか」

「なんか、そんな話、聞いたことがあるな。旦那の転勤で彼女もアメリカに行ったとか」

「その先輩が帰国して、代わりに私が赴任することになったのです。辞令は四月ですが、引継ぎもあるので今月には日本を発たなければいけないのです」

「香奈と結婚したその先輩とやらが、日本に戻ってくるのなら香奈も一緒に帰国するはずだ、そうすれば、香奈と不倫できるチャンスもあるぞ。しかし、問題はどうかやって香奈と会うかだ」と正彦は思案しながら土井の話聞いた。

「先輩、どうしたんですか、ぼんやりして」
「いや、ちよつと急に仕事のことを思い出してね」

夏美が入る女子校の入学前の説明会が開かれることになった。正彦は彩子から『その日にどうしても外せない編集会議が開かれるので参加出来ないから代わりに行ってくれ』と言われた。女子校の学校説明会などは母親ばかりだろうと思って気が進まなかったが仕方ないので出かけた。やはり、思った通り母親がほとんどだ。なかには夫婦で参加している者もいた。説明内容は合格通知と一緒に送られてきた書類の内容を確認だけでさしたる新しい情報はないようだった。なにもわざわざ来ることなかったと思つた。終わつて、出口に向かつて歩いている時に、足早に正彦を追い越して行つた女に目が釘づけになると同時に目を疑つた。

「なんとということだ、香奈ではないか。でも人違いだろう、香奈がこんなところにいるわけがない」と思うが心臓が高鳴る。すると、どうということだろう。忘れものでもしたのかその女が振り返つて、校舎に戻ろうとするではないか。二、三歩歩いた女と目が合った。やはり、香奈だった。彼女も怪訝な顔で正彦を見ている。二人とも立ち止まった。随分、長く感じたが数秒経つた頃だろう、香奈が声をかけてきた。

「あら、正彦さんじゃない。お久しぶり。お元気？」

一度、縁を切つた男女が再会した場合、気まずい雰囲気でお互い避け合うか、懐かしさを感じるかのどつちかのようなのだが、この二人は後者のほうだった。

「やはり、香奈だったんだ。人違いだと思つた。元気そうだね。でも、どうしてこんなところにいるの」

「貴方こそ、どうして」

「うちの娘が今年ここに入る事になったんだよ。妻に急用が出来てどうしても行けないというので代わりにきたんだ。君はなぜ？」

「三年前に旦那さんの転勤でニューヨークに行つていつたのだけれど、異動で日本に戻つてきたの。娘はちょうど、中学に入学する年だったんで学校を探していたら、ここは帰国子女枠があると聞いて申し込んだら、入学の許可がおりたので説明会に出たの」

「そういうことか」

「そうなの、すごい偶然ね」

正彦は自然のように切り出した。

「せっかく、会ったんだからお茶していかない？」

香奈は懐かしそうに笑顔で言う。

「いいわよ。これから予定があるわけでもないし」

二人は喫茶店への道すがら、別れてから今までのことをお互いに話した。香奈の話はいくらかは土井から聞いていた。それでも正彦ははじめて知ったような顔をして聞いた。

喫茶店に入っても同じような話を続けたが、香奈がふつと言った。

「貴方が大学を卒業する時に、私から『いい機会だからこれっきりにしましようね』と言った時、どう感じたの」

「そうだったな。俺が入社して配属が決まったときの事だったな。びっくりしたし『何を今更、どうしてそんなことを言うのか』と思った。でも俺の環境ががらりと変わって、それまでのような付き合いが果たしてずっと続けられるのかとも思った」

「貴方の配属先は北海道にある製鉄所だったでしょ。随分、悩んだわ。私は三年になったばかりで学校がまだあるでしょ。確かに遠距離恋愛もあるけど、果たしてそれがいいのかも……」

「それで」

「時々、会えるけど、それがいいいつまで続けられるか不安だったわ。貴方がだからそれまでの関係が続けてくれるのか自信がなかった。もちろん、貴方を嫌いになったわけでもなかったわ。もしも社会人になってから貴方の考えが変わって『別れよう』と言い出されたらどうしようって、すごく怖かった。それって、女にとっても惨めなことでしょ、悩んだ末、私から切り出したの」

「そこまで、悩んでいたとは……」

「プライドがあったのよね」

「……」

『これっきりにしましようね』という私の言葉に対して、貴方のほうから『別れるのは嫌だ』って言ってくれるのを待っている気持ちと『そうしよう』とやってくれるのを待っている気持ち、半々だったわ」

「そうだったのか。俺は迷った末に宙を見ながら『そうだね。君を今でも好きだけど、学生時代の思い出として君とのことは大切にと、心に仕舞っておくよ。一生、君のことは忘れない』って言った」

「そうだったわ。私はほっとする反面、とても寂しかった。別れた後、いつま

でも泣いていたわ。『なぜ、あんなことを言ってしまったのか、それにどうして貴方があっさり、そうしようと言うのか、どうしてなの、本当は私を愛してなかったんだわ』と書いて……」

香奈があまりに真剣な顔で話すので、正彦は気分を変えようとして言った。「香奈はその頃とほとんど変わってないよ。スタイルもそのままだ。色っぽくなっただね」

「いつのまにか、お世辞も随分うまくなったようね。私、もうアラフォーよ。子供も中学生。早いわね。あれから二十年近く経つよねえ」

香奈はそれまでの自分を回顧するように言った。やがて香奈の夫は帰国後にドイツ駐在の辞令が出て単身赴任することとなった。ふたりの関係が復活するのも時間の問題だったし、当然のようにそうなっていた。

四 それからの二人

白石との逢瀬を重ねるようになった彩子だったが、若い白石にすっかり魅了された。付き合い出して三年ほどしてから的事である。白石は最近、中東情勢に興味を持っており、是非、月刊エグゼクティブに書いてみたいと彩子に言った。彩子は編集長に相談してみることにした。

「編集長、中東情勢について月刊エグゼクティブで取り上げてみたらどうでしょう」

「兵頭さんは、昨今の海外でのセクハラや国内の政治家の女性蔑視発言などを取り上げたらと言っていたのに、なぜ、急に中東情勢なんかを言い出すの」

編集長の村山は怪訝な顔で訊いた。

「日本では対岸の火事のように見られていますが、世界的に大きな問題になっています。中東の内戦で多くの難民が出ています。これらには多くの女性もいます。また、戦地では兵士による女性に対するレイプが日常化しています。多くの女性が犠牲になっています。その辺りのことを読者に知ってもらうことも必要じゃないでしょうか」

「しかし、そんな危険なところに我が社の社員を派遣するわけには行かない。誰が危険な中東までわざわざ出かけて取材してくれるかだ。月刊エグゼクティブは日本を代表する月刊誌のひとつだ。単に、フリージャーナリストが売り込みきたものをそのまま鵜呑みにして掲載するわけにはいくまい」

「月刊エグゼクティブの記事を書くためにフリーのレポーターにルポ取材をお

願いするのです」

「そんな、危険なところに行ってくれるような人がいるのかね。それもちゃんとしたルポが書ける人だ」

「心当たりがあります。LGBT特集で記事を書いてもらって以来、いろいろとお願いしている白石さんです。彼なら引き受けてくれるのではないでしょうか。そんな気がします。海外での取材経験も豊富ですし」

「確かに彼の取材能力は高く評価するが、問題は引き受けてくれるかどうかだ。彼の身に取材中に万が一何かあっても、あくまでも自己責任ってことだ、身に危険が及んでも我が社が取材を依頼したということを一切口外しないことが条件だ」

大きな出版社や新聞は危険な地域での取材記事はフリージャーナリストから買うのが慣例だ。これを聞いて、彩子は取材中に白石に何かが起こるのではないかと一瞬、不安になった。

彩子は白石と会い、編集長とのやり取りを伝えた。

「予想した通りの反応だね。たとえ、取材を依頼しても『何かあって当社には一切、関係ありません』という態度だ」

「もちろん、取材にかかる費用は出してくれるっていうけれど。貴方の身の安全が一番なんだから、断つてもいいんだけど」

彩子は心配そうに言った。

「この前、言ったように僕は自分の目で見て書きたいんだ。悲惨な事態をだ。そうでなければ、本当の記事は書けないんだ。人の話や映像をベースにして書いたものは報告とは言えない。中東にも日本からフリージャーナリストが行っているようだが、彼らの書いたまともなルポを見たことがない。うぬぼれかもしれないが、僕ならやれると思う」

「貴方のルポに賭ける情熱はよくわかるわ。でも、やっぱり心配だわ」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずというよ。それに僕はこれまでにメキシコの麻薬シンジケートなども取材して危険な目にもあったことはあるが、危険に対する備えは出来ているつもりだよ。決して無理はしないから」

白石の少年のような純粹さと情熱に負け、編集長に引き受けるとの返事をすることにした。

編集長は白石が引き受けたことを意外に思ったようだったが、日本人の目で直に見た中東の様子をどう書いてくれるかと期待した。

正彦が海外出張、夏美も学校のクラブ合宿だったので、白石の出発の前日、

彩子は成田空港の近くのホテルに白石と泊まり、しばらくの別れを名残り惜しんだ。

白石を見送って十日ほどだった日曜日のことだ。正彦は朝からいない。彩子は「不倫相手とどこかに行ったんだろう」と思っていた。それを思うと、白石のいない日曜はつまらなかつた。

夏美と二人でテレビのニュースをぼんやりと見ていた。テロップに目が釘付けになった。そこには「日本人ジャーナリスト、シリアの内戦に巻き込まれて死亡」。彩子は一瞬、まさかと思つた。引き続き、アナウンサーの声。

「シリア北部の都市、ラッカの近郊で政府軍と反政府軍との衝突があり、多数の市民も巻き込まれた模様です。その様子を取材していた日本人ジャーナリストの白石淳一さんが政府軍の発したロケット弾によって亡くなったと現地メディアが伝えていきます。詳細は外務省がレバノンの日本大使館を通じて確認中です」

シリアの日本大使館は、内戦激化で閉鎖されておりレバノン大使館が代行している。白石から聞いたことを彩子は思い出した。

茫然となつた彩子を傍にいた夏美は不思議そうな顔で見ている。彩子は行くことを止めておけばよかったと悔やんでも悔やみきれなかつた。

その後の彩子の悲嘆は大きく、仕事に打ち込むことで白石を忘れようと努めた。

一方、正彦のほうだが、三年ほど経って単身赴任の香奈の夫がドイツから戻ってきた。夫が帰国してからも、正彦との関係はしばらく続いていたが、香奈の不注意で不倫がばれた。夫も香奈に一目惚れして、一方的に求愛し結婚にこぎ着けただけに、他の男に妻を寝取られたことは許しがたいことだつた。一時は、離婚騒動になりそうな気配だつた。しかし、夫の両親は体面を考えて息子に離婚しないで踏みとどまるように説得したのだつた。一方、香奈も許しを乞い、専業主婦で自分の生活のことを考えて計算高く、正彦と別れるという道をとつた。

夫は再びアメリカ駐在となつた。今回は高校生になる娘を横浜の親戚に預け、そこから学校に通わせ、香奈は夫とともにアメリカに渡つた。

正彦と彩子はお互いに秘密を持ったまま、形の上では元の鞘に収まつた。

(了)

